



シェイクハンド

第34号
H24.1

～静岡県訪問看護ステーション協議会便り～

なやみは半分、よろこび倍増

さあ みんなで手をつなごう!!



迎春

新年のご挨拶

静岡県訪問看護ステーション協議会
会長 佐藤 登美

明けましておめでとうございます。昨年のは、3.11の東日本大震災と共にやってきました。以後、日本列島はその情報と対応に追われました。そんな中で、社会の通念や人間の絆という関係や在り方などを考えた1年でした。訪問看護は、地域で関係を通じて行われるサービスです。被災地で頑張った看護師らの話題には、心が膨らむ思いを感じましたが、それで十分というわけにはいきません。ともあれ、今年は災害のないことを祈りながら頑張っていきましょう。



副会長 篠原 彰

新年明けましておめでとうございます。静岡県医師会では、平成23年度からの3年間、国の地域医療再生基金により在宅医療の推

進に取り組んでいます。訪問診療は多くの職種の人たちとの協働がキーワードですが、訪問看護ステーションの協力なしでは絶対に成就しません。本年度は、基金を有効に活用して訪問看護事業の推進を図っていきますのでご協力をお願いします。



副会長 上野 桂子

あけましておめでとうございます。

未曾有な大震災を脳裏において新年をお迎えのことと存じます。

今年は介護報酬改定・診療報酬同時改定に加え、小規模多機能と訪問看護の複合型サービス、24時間巡回型介護、看護サービスそして、介護職等による痰の吸引等訪問看護に関わることが山積しています。アンテナを高くし、医療・看護ニーズの高い要介護者を地域で支える訪問看護への期待に応えていく年にしましょう。



支部長あいさつ

東部支部長あいさつ

訪問看護ステーション千本
所長 櫻井 悦子

東部地区支部は今年役員4人全員の入れ替えになりました。前年度の役員が一人もいないのは事業展開していくのに困ることが多くありますが、前年役員や会員の協力で活動を始めることができました。これは、平成21年度に県の委託事業として始めた電話相談事業をやっていたからにはかなりません。平日9時～17時まで、25か所のステーション管理者が当番で一般の方々、サービス事業者、ケアマネなどの相談を直接うけるのが電話相談事業です。この事業を行うため定期的な会議を開催し皆で話し合う機会を持つことで顔の見える関係が築かれステーションの連携が深まりました。これにより、平成23年度も委託事業から外れましたが東部地区支部独自の事業として電話相談は続けています。この流れの中で東部地区支部の活動もあります。

訪問看護ステーションは、小規模な事業所が多く、静岡県のステーションは常勤換算5人未満が63%です。(平成22年度静岡県訪問看護協議会実態調査) 東部地区は4.5人で中部、西部に比べ一番少ない状態です。また、実態調査の中には入っていませんでしたが、平均年齢はどのステーションも毎年確実に上がっています。後期高齢者や認知症者の急増、多死時代そして2017年には療養病床は廃止されます。療養の場は在宅へシフトするのが国の方針ですが、在宅療養を担う訪問看護ステーションは高齢化が進み小規模事業所からなかなか脱却できない現状があります。

では、どうすればいいのでしょうか?すぐにいい解決法は見つかりませんが、実態調査等から示唆されているのは大規模事業所にすることではないでしょうか。看護師が、特に若い人が増えればタイムリーに訪問も行けるし、24時間緊急時訪問の当番回数も減ります。若い感性から学ぶことも多々あり、様々な可能性が出てくることはたしかです。しかし、そう簡単に大規模事業所に出来るわけがなく、求人しても集まらない現状はあります。現状の中でどうすればいいのか・・・。

今回、電話相談事業をする中で見えてきたものがあります。聞きあきた言葉かもしれませんが“連携”です。集まる機会を多くし、お互いの看護内容を知り、自分のステーションにいかせることは取り入れ、こんなことは出来ないと思ったら切り捨て率直に言い合うことではないでしょうか。ステーションは、お互い仲間であり、商売敵(?)でもありますが、協力して訪問看護の底上げをしていかないと取って代わる

ものが出てきます。来年の医療、介護報酬の同時改定ではその兆しが出ています。

在宅で訪問看護が果たすべきことは多く、望まれることも多くあります。利用者や介護者に寄り添う看護を提供するために皆で協力刺激しながら、今月からはまっている言葉“変わらないことは、変わることを”に東部支部長として役割を果たしていきます。



中部支部長挨拶

静岡県看護協会 ステーション清水
三浦 さえ子

平成23年3月11日の東日本大震災に被災されました東北地方の皆様には、まずは哀悼の意を述べ、お見舞い申し上げます。

平成21,22年と続いた静岡県訪問看護支援事業の集大成となるべく、中部支部全会員で取り組んでいた、平成23年3月12日の静岡県民対象のシンポジウム「老いを生きる」は前日の東日本大震災により断腸の思いで中止とさせていただきます。

しかし、この静岡県訪問看護支援事業に中部支部全体で取り組み活動したことは、次のような大きな成果を得ました。

- ①静岡・志太榛原地区の訪問看護ステーションマップを介し、様々な所で広報活動を展開でき、訪問看護の認知度を高め実際の需要に繋がった。
- ②同地区の地域包括支援センター、病院・診療所、介護・福祉施設、看護教育機関、地区生涯学習センター等へ出向いての顔の見える広報活動は、多くのネットワークの構築となった。
- ③同支部会員間の横の連携が密になり、相互関係が樹立され支援事業以外でも活動しやすくなった。

また、これらを継続することで特に病院との医療・看護連携が盛んになり、在宅への継続看護の充実に繋がっています。このことは大変重要であり今後も利用活用したいと考えています。

さて、中部支部長として2年、他3名の役員と共に未熟な運営でありましたが、今年度の中部支部活動の一つであります第1回中部支部研修会を、去る9月10日(土)13時から静岡県済生会看護専門学校視聴覚実習室を会場に「廃用性障害者の生活支援技術」と題し、静岡県立



大学大学院看護研究科教授・紙屋克子氏をお迎えし、半日コースでの講演とインストラクター2名による実技演習を開催いたしました。50名余の参加を得、受講生からは「明日からの看護ケアとしてすぐ生かせる内容」「重い後遺症がある療養者に継続してケアを提供することで現ADL維持のみではなく、自立まで可能であることが解った」等大変充実した研修だったと好評を得ました。

第2回研修会は来年1月28日（土）中部支部管理者会議の後、支部会員を対象に「平成24年法改正に伴う福祉・介護職の療吸引等に関する訪問看護師の役割」と題して、静岡県訪問看護ステーション協議会・上野桂子副会長の講演を予定しております。法改正の意図を良く理解し私達訪問看護師の課せられた役割と責任を社会の変動と共に考えたいと思います。多くの会員の参加をお待ちしております。

役員と支部長として4年半、この間私自身先に述べました静岡県訪問看護支援事業など多くの活動の中で、いちステーションの管理者だけにとどまらず一人の在宅医療に従事する看護師、あるいは人として貴重な体験をし、関係機関の皆様や会員、支部役員との関わりを築き深めることができました。今後、それらを糧に残された任期を、3人の役員と会員また事務局の皆様とさらに協力し活動していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



西部支部長あいさつ

訪問看護ステーション浅田
垣野内 恵子

謹んで、新春のお喜びを申し上げます。年末年始の訪問活動お疲れさまでした。平成6年に指定訪問看護制度ができ今年で18年になります。日本の超高齢化社会は年々進んでいき、訪問の移動中もシルバーマークの車が多いことを実感します。

訪問看護に求められることも多様化してきています。在宅での看取り、施設との連携、予防訪問看護、高度な医療処置、NICUからの退院など・・・そのそれぞれの看護に対応するために様々な体制作りをしてきました。訪問看護ステーションの運営の検討、職員一人一人の看護の質の向上、看看連携、地域の医療機関・介護保険関連施設との連携と奔走してきました。

私は、昨年10日間の入院をして、手術を受けるという体験をしました。悪性ではなかったのですが、自分は日増しに治っていく状況だったのですが、6人部屋の中には悩みを

抱える人が多く、患者目線で看護師の言葉を聴く機会になりました。強く感じたのは、シフトごとに変わる看護の継続が難しいことです。これは、訪問看護にも共通する課題だなと感じました。カーテン越しに聞こえてくる看護師の問いは、いつも電子カルテの



クリニカルパスのままの観察項目です。患者側は、毎回「私は、痛みではなくて、痺れのような重い違和感なんです。」と訴えているのに、また次のシフトの看護師も「痛みはありますか?」と聞いています。短く要約された記録の中に、いかに患者さんの生の声を残し、次に引き継いでいくのか、その大切さを感じました。また、私自身が自分の患者としての要望をかなえるために、どの看護師にどのタイミングで、どんな言葉を使って要求しようかということをよく考えました。医療の仕組みを理解している私が、10日間の入院をただけでもこの感情を持つのです。深刻な病気を抱える方や医療や病気が分わからない方なら、なおさら大きな悩みを持つだろうと考えました。そんなことで悩まさない、そんな悩みに気づき支援ができる看護がしたいと感じました。

この春からも診療報酬と介護報酬の同時改定があり、私たちの今までの努力が評価されながら、さらに期待が高まる春になりそうです。訪問看護の役割の重責や身体的な疲労が重なっていませんか。訪問看護のやりがいや醍醐味を後輩職員に伝えられていますか。訪問看護ステーションの今後の発展のために私は次のことが大切だと考えています。皆さんも同じようなことをお考えかと思ひます。私自身が目指す職場でもあります。

1. それぞれの経験を積んだ職員が自分の知識や経験を生かした看護が展開できる環境作り。
2. 新しい訪問看護職員育成のために訪問看護ならではの魅力、醍醐味を伝えていくこと。
3. 必要な学習の場を作り、個々が学んでいくことで切磋琢磨でき、看護の質を向上していくこと。
4. 職員一人一人の貴重な気付きや意見を尊重すること。
5. 訪問に行った職員が、仕事での悩みや揺らぎを受け止められる土壌を職場に作り、共に悩み共に解決していくこと。
6. ワークライフバランスを尊重した職場作り。

思いつくままに挙げてみました。私たちが年を重ねて、訪問看護を利用する状態になった時、どんな看護師に来てもらいたいのか、看護師にはどんな言葉をかけてほしいのか・・・そんなことを思い描きながら、次世代の訪問看護師の育成に取り組むことが、今の私たちの役割であると考えています。

今年もよろしくお願いいたします。



ステーション紹介

東部 訪問看護ステーションみなみ

今村 眞理子

当ステーションは、合同会社みなみの事業所として、今年度7月1日に開設しました。

場所は駿東郡長泉町南一色です（クレマチスの丘に近いです）。ステーション名のみなみはこの地域の南からとりました。訪問地域は、長泉町、清水町、裾野市、沼津市、三島市の一部と広範囲にわたっています。道路事情がよいため移動時間はそれ程問題にはなりません。

スタッフは常勤3名です。訪問看護師としての経験が豊かなスタッフです。

介護保険と医療保険の利用者比率は3対1位です。小児の訪問も積極的に受け入れています。

在宅の看取りは7名ありました。開設して4ヶ月過ぎましたが、初めて関わる関係者、訪問看護を初めて利用したケアマネジャーさんからの依頼が増えていることは大変うれしいことと感じています。ひとつ、ひとつの事例を大切にしながら、とにかく3人でしゃべくり、知恵を出し合い工夫しながら仕事を楽し

くやっいてこうという姿勢は所長の私を大変勇気づけてくれます。

最近、秋山正子さんを招き在宅ターミナルアドバイザーをうけました。自分たちの経験の範囲で対処しがちな所から踏み込んで今回も気づかされることが多く、訪問看護師としての役割を幅広く考えるよい学びとなりました。

私たちには「訪問看護を知ってもらいたい、そして、使ってもらいたい」という思いが常にあります。地域に根ざしたステーションになるために今後はもっと地域を知っていきと思っています。そして、利用者様一人ひとりの「オンリーワンの看護」を提供していけるよう日々励んでいきたいです。

当ステーションを開設するにあたってはたくさんの方々に支えてもらい、現在も応援して頂いております。ありがとうございます。

これからもよろしく願いいたします。

次回は『訪問看護ステーションあおぞら』さんです。



中部 訪問看護ステーションはきり

上倉 麻衣子

皆様、こんにちは。「訪問看護ステーションはきり」です。

私たちの事業所は平成18年にスタートし今年で6年目になります。私たちの事業所は理学療法士が立ちあげたことからリハビリテーション看護に力を入れている事が特徴です。

現在は看護師4名・理学療法士2名・作業療法士1名で活動し、中には呼吸療法認定士・福祉住環境コーディネーターの資格を持つスタッフも在籍しています。

訪問看護ステーションはきりでは、看護師とセラ

ピストが密に連携して訪問看護の提供をしています。

私たちのステーションは24時間体制ではありませんが、利用者様・ご家族様と向き合うことを大事にし、病気や障害を抱えながら在宅生活を送ることでの不安や心配事など、ゆっくりとお話を聴き些細な事も見逃さないよう接しながら不安や心配を少しでも軽減できるよう日々努めております。

「全身状態の観察」や「病状管理」「療養上の世話」と同時にセラピストと連携することで、利用者様とそのご家族様の「生活」により密着した看護を提供することを目標としています。そして、看護とリハ



ビリの専門的知識を存分に発揮することで利用者様・ご家族様の在宅生活を支援していけるよう努めていきたいと思っています。「このステーションを利用して良かった」といわれるような看護・リハビリの提供ができるよう日々努力していきたいと思っております。

次は、『のぞみ訪問看護ステーション』さんです。



西部 森町訪問看護ステーション

中根 民与



『こんにちは 寒くなったね～ 変わりない?』
とまず笑顔でご挨拶(^.^)

介護者にねぎらいの言葉をかけて 今日訪問看護が始まります。

はじめまして 森町訪問看護ステーションです。

ここ森町は、太田川の豊かな流れに育まれた風情豊かな「遠州の小京都」です。

‘地域と共に或る病院’を目指す「公立森町病院」に併設された 公立のステーションです。

当STは、H2年頃から外来看護師が数名の対象者に行っていた訪問看護が始まりで、以後在宅ケア室に移行し、H11年9月から現在の訪問看護ステーションになりました。

現在のスタッフは看護師7名（常勤4人 パートアルバイト3人）ケアマネ1名事務1人です。平均年齢46歳ですが 気持ちは・・・ずうずうしく20代です。

チームワークは抜群で昼休みの賑やかな事よく食

べる事は どの職場にも負けません！！

笑いあふれる働きやすい職場です。

利用者数は70名前後で 月の訪問件数は350～400件 1日の目標件数は20件です。

24時間連絡体制をとり緊急時の訪問や電話での相談にも応じています。森町病院併設のため、入院中からの利用者様・病棟看護師との関わりも大切にしています。在宅ターミナル療養者様がスムーズに在宅移行できるために H21年に居宅介護事業所を開設しました。この事で残された短い時間を大切にできるように、退院調整 サービス調整がスムーズに行えるようになりました。また、森町病院は往診をしていますので、連携をはかり タイムリーに状態変化を伝え、方向性の確認をすることで、ご本人・ご家族の不安へも寄添える看護を提供しています。また、グループホームへの医療連携も図っています。

H23年12月には家庭医療クリニックがオープンし、訪問看護ステーションの事務所もそちらへ移転します。家庭で療養する方やご家族がもっともっと安心して過ごせるように家庭医療科との協働も実現させて行きたいと考えています。

『生きること』を支援できる訪問看護は看護の本質を感じることでできる奥深い分野です。

『訪問さんに来てもらってゆるくなったや～(森町の方で安心できたの意味)』

こんな言葉にパワーをもらってこれからも心の通った訪問看護を続けていきたいです。

次は「訪問看護ステーション小笠」さんです。



「訪問看護ステーションとの関わりについて —退院調整看護師という立場から—」

浜松医科大学附属病院医療福祉支援センター
看護師長 工藤 ゆかり

先日、日本看護協会発行の“協会ニュース11月号”を多くの方が興味を持って読まれたと思います。厚生労働省が10月31日第7回医療計画の見直し等に関する検討会を開催し、在宅医療の方向性について論議を行なったという内容です。まだまだ在宅医療については地域差が大きく、偏りが認められ、抱える課題も地域によって異なることが指摘されています。また、十分に設置されていない訪問看護ステーションの現状が指摘され、国の対策として在宅医療の充実に取り組むべきだとしました。

そこで、在宅医療が推進されている現在、医療依存度の高い患者でも安心して在宅で過ごすことが出来るよう、病院の退院調整看護師としての立場から少し考えてみようと思います。しかし、私もこの退院調整部門に異動してから一年半余りしか経過していないため、在宅医療の知識は充分とはいえないとは思いますが、私なりに考えてみたいと思います。

平成15年4月に当大学病院に医療福祉支援センターが設置され、7年が経過しました。前方連携といわれている当院受診患者へのアプローチや後方連携といわれている退院患者へのアプローチは当初、事務職員やソーシャルワーカーが中心になって行なわれ、医療者の専属的な配属や現場対応への参画は遅れているのが現状であると感じています。近年の急性期病院では、在院日数が短縮し、新規入院患者の確保と速やかな退院、転院のマネジメントが求められています。以前は各病棟単位でこれらの作業が行なわれていましたが、当センターが一元的に同マネジメントを行なうことで現場の負担軽減にも繋がっていると確信しています。たとえば、入院中の患者が在宅医療を希望した場合、今まで利用している訪問看護ステーションがあれば、当然そこに連絡を取り、支援の継続をお願いし、入院中の経過や今後の病態予測、またそれに合わせて今後必要になると予測される医療処置等の情報交換を行ないます。私たちは情報交換のカンファレンスの為に日程調整を行なったり、病棟看護師からの情報をまとめたりします。担当の訪問看護ステーションがない場合は本人や家族の意向を確認しながら担当のステーションを決めていきます。訪問看護ステーションが決まれば、前記と同様にカンファレンスの日程調整を行ないます。この退院前のカンファレンスはとても重要な意味を持っていると私は考えています。単に患者の疾患や病状説明だけではなく、患者の思い、家族の思いをステーションの方々に繋げて行く場所になるからです。情報の共有については紙面だけでは不十分な部分もカンファレンスを通して補うことが出来ると思います。特に精神面については言葉の使

い方でニュアンスが微妙に違ってきますから、必ずカンファレンスで伝えるように心がけています。

しかし、現状の訪問看護ステーションとの関わりの中で私が問題だと思っていることが2点あります。1点は患者の情報を共有するための情報用紙です。現在、病院毎に形式の違う情報用紙を使用していますが、これを市あるいは県レベルで同じ情報用紙に統一して使用すれば、訪問看護ステーションも病院も情報の共有がしやすくなると思うのです。看護ケアの継続の為に、看護に関する情報提供が不可欠ですから地域側と病院側で「ずれ」が生じないためにも情報用紙の統一は重要だと思います。ただ、情報用紙を統一することは大変な作業になると思いますが、看看連携のためには大きな成果をもたらしてくれると思います。2点目は在宅に繋げるタイミングです。外来通院中から早期の介入が必須になると思うのですが外来看護師には多くの業務があり、今後の療養生活に関してアセスメントする余裕もなく、私たちもそのような情報を得ることが難しく、外来通院中からの介入が困難になっているのが現状です。外来通院中から入院をしなくても良いサポート体制を作り、在宅療養を継続していくことができるような支援体制を早く作りたいと思います。

“病院は敷居が高い”という考えをなくしてもらえよう、訪問看護ステーションの方々が病院内に自由に入出入りし、病棟のカンファレンスにも参加して情報の交換や共有を図れるような病院側の土壌作りも大切だと考えています。その為にも地域のネットワーク作りは重要な作業になります。在宅医療を希望する患者のために、訪問看護ステーションの方々と病院看護師で、より良い在宅療養環境を一緒に考えて行けたら、そして患者と一緒に支えて行けたら、本来の継続看護が実現できると考えます。今後も訪問看護協議会等の主催する研修会に積極的に参加して、訪問看護ステーションの方々と顔の見える関係作りを行ない、いろいろと相談の出来る関係を築いていきたいと思っています。





「家庭医療クリニック」とは

家庭医療クリニック師長 岩倉 奈保美

12月1日家庭医療センターがオープンしました。これまで森町病院に併設していた森町訪問看護ステーションがセンター2階に移設となり、1階は家庭医療クリニックが開院しました。「家庭医療クリニック」聞きなれない言葉だと思いますが、これは国の地域再生機金を受けた静岡県の実業です。県のバックアップを受け、磐田市、菊川市、森町の2市1町が連携を取り協力しあい良質な家庭医を育成することを目的として「家庭医育成プログラム」に取り組んでいます。医師は都市志向・専門分化し、地域では医師数の減少により安心して生活できなくなっています。家庭医は小児から高齢者まで家庭で暮らせる範囲内の疾患を診察する全科診療の医師です。後期研修後から他施設で経験を積んだ30歳代の医師がさらに研修を3年間積んで家庭医になろうと頑張っています。このプログラムでは現在2年目

の家庭医研修医が3名、1年目家庭医研修医が6名、森町家庭医療クリニックでは2年目研修医師が2名、1年目研修医師が3名、指導医2名の体制で診療しています。研修体制をとっているため、常時クリニックでは2名～3名の医師が午前、午後分かれての診察をし、診察後は指導医と相談し医療を提供しています。病院では疾患別に整形外科、内科など各診療科に受診になりますが、このクリニックでは全科を1人の医師が診察します。親子での受診も内科、小児科と別れずに受診ができます。また森町は高齢者の独居世帯が多いことや山間部が広がり医師を待っている人も多い地域です。まだ始まったばかりの家庭医療クリニックですが、徐々に地域のニーズにあった診療体制をとっていこうと考えています。ご支援よろしくお願いします。





静岡県訪問看護推進事業 市民公開講座 講演「老いをどう生きるか ～最後まで在宅で～」

静岡県の委託を受けて取り組んでいる訪問看護推進事業の在宅普及ケアとして、市民に訪問看護を理解して頂くための市民公開講座を開催します。

講師に「おひとりさまの老後」の著者である元東京大学大学院教授の上野千鶴子氏をお招きし、「老いをどう生きるか ～最後まで在宅で～」というテーマで講演頂きます。

開催日時：平成24年3月10日（土）13時30分～15時30分

講師：上野 千鶴子（元東京大学大学院人文社会系研究科教授）

会場：あざれあ大ホール

静岡県在宅医療推進センター事業 人材育成のためのスキルアップ研修

マンパワーの確保は、どの訪問看護ステーションにとっても最重要課題の一つだと思いますが、新人が就業しても22年度の実態調査結果では、退職者の内、1年未満での離職率が35%、1年～2年未満で17.4%と合わせて半数が離職していました。定着させるために、新人をどう育てていけばよいかを講義とグループワークを通して考える研修を開催します。

テーマ 「人材を育成するために

～訪問看護ステーションで管理者、スタッフが新人をどう教育するか～」

開催日 平成24年2月18日（土）13時30分～16時30分

講師 中村順子氏 日本赤十字秋田看護大学准教授

会場 静岡県看護協会第1研修室

訪問看護セミナー「症状・徴候別アセスメント」

フィジカルアセスメント人形のフィジ子を用いて、演習をしながら学ぶ研修です。演習を行う関係で人数に制限があります。テキストは、フィジカルアセスメントの講義で使用したものです。

開催日：平成24年3月17日（土）9時30分～16時30分

講師：山内 豊明（名古屋大学医学部保健学科教授）

会場：あざれあ第1研修室

受講料：一般 10,000円、会員 6,000円

定員：42名

東部・中部支部研修会のお知らせ

診療報酬改定を中心に、下記の日程で研修会を開催します。

【東部支部】 開催日：平成24年3月24日（土）13時30分～16時30分

テーマ：「介護保険・医療保険改正について」

講師：萩原 正子 オフィス萩原代表

会場：沼津労政会館

【中部支部】 開催日：平成24年1月28日（土）15時30分～17時

テーマ：「平成24年度法改正に伴う訪問看護師の役割」

講師：上野 桂子（社会福祉法人 聖隷福祉事業団 理事・顧問）

会場：サンパレスホテル

各研修等の詳細はホームページでご確認下さい。

静岡県訪問看護ステーション協議会ホームページ <http://www.shizuoka-vnc.jp/>

編集後記



シェイクハンドNo.34

2012年1月発行

発行所 静岡県訪問看護ステーション協議会

静岡市駿河区南町14-25

Tel 054-202-1752

Fax 054-202-1753

e-mail sizuokahoumonst@cy.tnc.ne.jp

発行人 佐藤 登美

編集者 石井 由美（訪問看護ステーションなかいず）東部

竹澤まゆ美（訪問看護ステーション 萩）中部

大澤 三枝（袋井市訪問看護ステーション）西部